# おしえて、恋のイロハ。

MMR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おしえて、恋のイロハ。

【Ｎコード】
Ｎ８４４７Ｆ

【作者名】
ＭＭＲ

【あらすじ】
兄妹のように過ごしてきた。だけど私の気持ちは変わっている。恋人ごっこな関係と今は一方的に思っているけれど、本当はごっこなんて外したい。あなたはどうなの？おしえてほしい…。

## Ｔｅａｃｈ．０　あなたの気持ちを、おしえて。

「はぁ…落ち着くなぁ…」
「はぁ…おまえが落ち着いても、自分が落ち着かないんだが…」
私と一緒に2人で息をつく、鳥のさえずりの心地良い昼下がりの公園のベンチ。
休日だというのに人もまばら、時折ランニングしている人を見るくらいなので、とても静かで、私のお気に入りの場所だった。
だから息つく音が良く聞こえるのだけど、その理由は私と彼で違っていた。
「何が不満なのー？」
わざとらしさが出るように、私は体をくっつけて彼の顔をのぞきこみながら、私の思う精一杯の甘え声で言ってみる。
「わかってんだろ…その腕だよ、腕」
「これのことー？」
私は、さっきから自分の腕でつかんで離していない彼の腕を引き寄せる。
「あっ、胸にあたったぁー、えっちー、責任とってよね」
彼は私のその言葉にまったく反応しないようなそぶりで、そして言葉も出さずに、私から目をそらした。
「むむっ…ムシときましたか」
いつも通りの行動で返してくる彼をつまらないなぁと思いながら、頭を彼の肩にあずけ、更に身を寄せてみる。
もうどうにでもしてくれ、という彼のオーラが見えた。

彼とはじめて会ったのは6年前のこと。
中学1年生だった私は、入学式が終わったあと、右も左も分からずに学校の構内を歩いていた。
この日、他の学年の人は基本的に休みみたいだけど、これをチャ

ンスと考えて部活の勧誘をするのがこの学校での半ば慣例になっているようだった。
私はまだ何も決めていなかったし、後でゆっくりと考えようとしていたんだけど、けっこう強引に引き入れようとするのでかわす力ももう限界になっていた。
それを拒否していないと見たようで、3年の男子に話だけでも聞いて欲しいと言われて連れて行かれそうになったんだっけ。
「すいません、妹なんですけどまだ何も決めてなくて。ゆっくり考えさせてあげてくれませんか」
そこに現れたのが、彼だった。
私には兄はいないわけで…すぐに助け舟を出してくれたことに気付いた。
たぶん、お兄さんがいるとしたらこんななのかな…という気持ちも一緒に感じながら。

「それにしても…高校も卒業しようっていうのに会った頃からまったく変わらないのな」
彼が何度目かわからないほどのため息をつく。
そんなことはない。確実に変わっていることはある。
ただ、それはまだ彼に伝えることはできないけど…
恋人ごっこ。今の私たちの関係をうまくあらわすと、この言葉が一番的確なのかもしれない。
お兄さんと思っていた私の気持ちは、時間をかけて別の感情に変わっている。だけど、彼の気持ちを確認したことはない。
だから、『ごっこ』で止まっている。
本当は『ごっこ』なんて言葉ははずしたい。本当にこのままで良いのかどうか悩むこともある。
でもやっぱり出会ったあの時と変わらずに、妹としてしか見られていないんじゃないかって。
私が考えを色々とめぐらせてしまい、今度は彼が私の顔をのぞき

こんでくる。
「どうした、急に黙って」
「う…ううん、なんでも。変わらないなんてひどいなぁ、少しは変わってるよ。ほ、ほら、出るとこも出てきてるでしょ」
冗談で私が彼の顔をのぞきこむ時は何も思わずにいられるのに、同じことを仕返されると言葉に詰まってしまう。
そんな気持ちを隠そうと、彼を動揺させようと思って胸を張ってみた。
でも「いや、そうは見えないんだが…」と、彼が小声でつぶやいているのを私は聞き逃さなかった。
「むー」
少しは意識してもらえるかなと思ったのに、返事がどうもそっけない。
そんなに私には魅力がないのかな、と思ってしまう。
そう思われているままでは悔しいので、つかんでいる彼の腕をさらに引き寄せてみる。
彼の顔が少しだけ赤くなったように見えた。こういう時、彼のことがかわいいと思ったりする。
「う…まあ、育ってることは育ってるんじゃないか？」
「やっぱえっちー」
ちょっとだけ嫌がるふりをしてみるけど、内心ではけっこう嬉しかったりする。
だってそれが期待していた答えだったわけだから。でも素直になれないのが女心なんだよ。
少しは進展しているのかな？とか、私のことをどう見ているのかな？とか、1人で盛り上がったりして…
そんな風に考えてしまうのも、やっぱり彼の気持ちが分からないから。
だからそろそろ、はっきりしたい。

あなたの気持ちを、おしえて。

## Ｔｅａｃｈ．１　私の気持ちを、おしえて。

近葉（このは）かなめ。それが私の名前。
かなめというのは、もともと扇にある一本一本の骨をまとめるために軸になる部分に通す釘のことらしくて、そこから人をまとめられるようにとつけられたみたいだけど、私はそれとは別に、その響きが好きで気に入っている。
というか、本来の意味の方はあんまりその期待に応えられていないかもだけど…
そうそう、ところでなぜ今名前の由来を思い返したりしているのかというと。
「あら、こんなところで会うなんて偶然ですね」
それは私がさっきまで腕に抱きついていた男の人…木下健彦（きのしたたけひこ）先輩に、突然正面から女の人が声をかけてきたからだった。
「お、おう…なんでこんなところに」
「言わなかったかしら、大学に行く時にここを通り道にしているんですよ」
木下先輩の声が上ずっているように聞こえた。
しばらく2人を見ているといい雰囲気で…
その空気に押されて、私は木下先輩から腕を離していた。
それから木下先輩はその女の人としばらく話しこんでいる。
1人置いてきぼりにされてしまって…だからその時なぜか名前のことを考えてしまっていた。
「ところで、そちらにいるのは妹さん？」
「はえ？あっ…えと…」
会話に入っていなかったにもかかわらず、その女の人にいきなり話を振られてしまった。
今まで名前のことを考えていたから、何も話しかけられる用意なんてしていなかった私は、自分でも驚くくらいの変な返事をしてし

まった。頭が真っ白になる。
「いや、高校の後輩なんですよ」
「は、はい。近葉かなめといいます。はじめましてっ」
木下先輩のフォローになんとか助けられながら自己紹介をする私。こういう時にサポートしてくれるので、頼りになるんだよね。
「あら、かわいい後輩さんね。はじめまして。飯倉(いいくら)このみよ。私にとって木下さんはサークルの1年後輩にあたるの。つまり、大学1年ってことね。あ、ちなみに留年はしてないわよ」
腰くらいまであるロングヘアーを風に遊ばせながら、少しかがんだ体勢で私に顔を近づける。
飯倉先輩、かぁ…聞いていないことまで話してきたけど、明るい人だなという印象がよく伝わってくる。だけど決して子供っぽいというわけではなく、なんだか香水とは違う大人の香りを感じた。
「ところで、かなめちゃんは何年生なのかしら？」
飯倉先輩は太陽をバックに私を上から覗き込むような感じで、風が前髪を揺らすのをかきあげながら聞いてくる。大人っぽいという印象があったからか、なんだか子供扱いされているようで悔しい。
私が座っていて飯倉先輩は立っているわけだから、そうなるのは当然なんだろうけど。
「高校3年です…飯倉先輩ですね」
「あら、そんな固い呼び方しないでよ。1年しか違わないんだし、名前で呼んで欲しいな」
「じゃあ、このみ先輩」
「うーん、まあいいかな。よろしくね、かなめちゃん」
たった1つしか年齢は違わないのに、この差はなんなんだろう。だいたい話をする時は私が進めるほうなのに、このみ先輩と話していると調子が狂ってしまう。
さっき感じた大人の香りに加えて、今度は大人の余裕を感じた。
「じゃあ、私はこれで失礼するわね。友達と約束があるのよ」
「ああ、じゃあまた」

「はい、このみ先輩、またです」
木下先輩に続いて、私はその余裕に振り回されながらも、このみ先輩になんとかあいさつをする。私の言葉を聞いて、このみ先輩はこの冬の日差しのようにやわらかな笑顔を向けて歩いていった。
姿が見えなくなっていくのを見ながら、今さらだけど初めて会ったのにこのみ先輩という呼び方はおかしいかも…なんて思う。
私がいつも木下先輩の近くにいるから、自分も関係する人のように見えるのかもしれなかった。
「サークル入ってたんだ。はじめて知ったよ」
「ああ、一応だけど。ほとんど出てないよ、名前だけを貸している感じで…人があまりにもいないからだって」
「そうなんだぁ…」
サークルというと、いかにも大学の活動の場という感じがする。
私がいきなりサークルのことを話した理由。それはこれまでを振り返ってみて、木下先輩から大学での活動のことをそれほど聞いていない気がしたから…だから、知っておきたいと思った。
でも、今の話ではそれほど活動しているというわけではないみたいだし、話すほどのことでもないのかも。
だけど、なんか…
「あんまり大学でのこと、話さないよね？」
「そうか？まあ、話すほどのことでもないからな。講義受けて、色々と調べたりとかして…聞いてもそれほど面白くないぞ」
私がさっき思ったとおりそのままの返事を聞けて、以心伝心しているような気がして嬉しかったり、安心したり。
…あれ、なんで安心なんて気持ちがあるんだろう？
木下先輩の言葉をそのまま受け取れば確かに安心と言えるんだけど、本当はムリしてウソをついていたとしたら？
さっきの様子といい、このみ先輩といい感じになっていたとしたら？
ふと、安心が不安に変わる。

私は、本当に先輩のそばにいていいの？
そもそも私は先輩を好きになっていいの？べったりくっついているのは迷惑と思われているのかもしれない…
考え出すと止まらなくなって、本当に私が先輩を好きなのかどうかまで分からなくなる。
どうしてだろう、だれか…

私の気持ちを、おしえて。

## Ｔｅａｃｈ．２　苦しみを、おしえて。

吸い込まれそうになるほどまっすぐな道の両端に、いちょうの木が植え込まれている。
時期が過ぎて葉が全て散っているけど、管理がちゃんと行き届いているみたいで、あいにく黒い綿のような広がりを見せる空と合わせても寂しさを感じなかった。
そして道をぬうように左右に広がる道、そこには白い建物が並んでいる。
私の目の前には、私の身長とは比にならない…神社の鳥居くらいに太く大きい２本の柱。見上げると、なぜか天気とは逆にまぶしく感じた。
「大学って、すごいなぁ…」
だけど、私もあと数ヶ月後にはここを毎日のようにくぐることになっている。
頑張った証拠が、一般入試よりも早く出たのが嬉しかった。動機は、ちょっと不純だけど。
私は今、その不純な動機に大きくかかわる人を待っている。
「んー、今日はこのくらいの時間になるはずなんだけどなぁ…」
波のように押し寄せてくる人を、つま先を立てて一人一人目で追っていく。
特に待ち合わせをしているわけでもない、私が勝手に待っているだけなんだけど…
「気付けなかったのかな…んー、私もまだまだかなぁ」
人もまばらになっていく。その動きはスローモーションのようにゆっくりに見えて、私一人だけが取り残されたような気になる。
私は、焦っていた。
自分の気持ちがわからない。相手の気持ちもわからない。何もわからなくて、気付いたらここにいた。

だけど、その相手に会ってどうするつもりなんだろう。相談するなんて、できるわけない。だってその相談相手の気持ちがわからないで焦っているんだから。
「木下先輩…」
その相手の名前をつぶやく。気持ちが言葉といっしょにこぼれ落ちそうになった。
「なになに、木下先輩っての探してんの？オレが一緒に探してやろうか？」
独り言のつもりだったけど周りに漏れていたみたいで、私は誰かに声をかけられた。
「えっ…あ…その…」
顔を上げてその人を見る。男の人で、髪を茶色に染めて立てているのがあまり良い意味でない方で特徴的だった。
私はその外見から、嫌な予感しか感じられなかった。考えるよりも体が早く反応して、既に後ずさりをはじめていた。
「女の子を放っておくなんていただけないなあ。文句言ってやるよ」
「い…いいですっ、勝手に来ているだけなんで…」
「そう言わずに…あいたっ！」
「また会ったわね、かなめちゃん」
男の人の詰め寄り方に戸惑っていた中、また一人、横から声がした。
「…こ、このみ先輩。お久しぶりです」
そこには男の人の耳を引っ張りながらも、前に会った時のようなやわらかい笑顔を崩さないままの表情のこのみ先輩がいた。
「あんまりこの場所に立ち止まっているとだめよ。こういう男に引きずられることになってしまうからおすすめしないわ」
そう言って、このみ先輩は耳を引っ張るだけで私の前にさっきまでの勢いが無くなっているように見える男の人を差し出してくる。
「何だよ、オレは悪者扱いか…」
「当然でしょう、さっきの声のかけ方はないわ。もうちょっと女の

子への配慮を勉強しないといけないわね。ごめんなさいね、この人なんか知らないけど雑誌かなんかに影響されてカッコつけたがるのよ。この茶髪もそう。似合わないことはするべきじゃないと思わないかしら？」
「は、はぁ…」
今度はこのみ先輩の勢いに押されて、私は後に続く言葉もないうなずくだけの返事しかすることができなかった。
とにかく、どうやらこのみ先輩とこの男の人は知り合いらしいことだけは分かった。
「そろそろ耳を離してほしいんだが…」
「あら、ごめんなさい。気付かなかったわ」
このみ先輩がずっとつかんでいた男の人の耳を離す。けっこうな力が入っていたらしくかなり赤くなっている。私の方が心配や申し訳なさを感じるくらいだった。
だけどこのみ先輩は何もそこに触れることなく、手のひらで追い払うジェスチャーをした。
「悪いけど、急用ができたわ。あんたは先行ってなさいな」
「何だ急に…っと、わかりました！帰ります！」
突然その男の人の顔色が変わると、素直に帰っていく。そのタイミングは、顔を私からその男の人に向けた時だった。
な、何が起こったんだろう…後ろ姿しか見えていなかったから、よく分からなかった。
「大人の世界にはね、分からない方がいいこともあるのよ」
再び私に顔を向けたこのみ先輩は、私の心の声を聞いていたかのように笑顔を向ける。
「あ、あはは…」
私も笑うことしかできなかった。
「冗談はおいといて…急用というのはあなたのことよ」
「あ…はいっ」
本当に冗談なのかわからないような気もするけれど。そのことを

深く考える間もなく、このみ先輩は話を続ける。
「木下さんを待ってるのね？」
私は正直に待っていることを伝える。するとこのみ先輩の顔が苦いものを含んだような表情に変わった。
「知ってる？彼、けっこうモテるのよ。だけどあなたがいるからなかなか周りの女の子が近づけないみたいなのよ。彼に聞いたけど、かなめちゃんは妹のような存在だって。そのために彼女ができないのは彼のためにならないような気がするわ」
このみ先輩は目線を横にやって一つ息をついて言う。
そういえば人づてとはいえ、木下先輩の気持ちを聞いたのは初めてだ。
でも、あまり聞きたくなかった言葉だった。妹のようにしか思われていないのは分かっていてもショックだった。
思えば、最初に出会った時からそうだったわけだけど…
「だからね、あんまり待ち伏せとかしない方がいいと思うわ。さっきはあのバカが相手だったからいいけど、今度は保証できないわよ？会えたとしても彼への負担になるかもしれないわ」
負担になる、というのは今まで考えたこともなかった。
本当にそうだとしたら…私はどうすればいいのだろう。
「分かりました…」
「うん、よろしい。じゃあ、私は行くわね」
「はい、このみ先輩、また…」
このみ先輩は、私の返事を深く掘り下げることなく冬の風のようにいなくなってしまった。
私自身、今何が分かったのか分からないのに、何に納得したのだろう…
この話を聞いている限りでは、木下先輩が私に特別な感情を持ってくれてはいないということみたいだけど、だからといって私が諦められるかというと…
「わかんないなぁ…」

誰にも聞かれることない言葉を、私はつぶやいた。
「何が分からないんだ？」
…どうやら、誰にも聞かれることないという部分はすぐさま前言撤回しなければいけないみたいだった。
「木下先輩…」
「もしかして…待っていたとか」
「うん！ちょっと話したくて…」
だけど木下先輩は私の言葉をさえぎって。
「悪いけど」
空気の流れが一旦止まったような感覚。先輩は一つ息をついて言った。
「しばらく近づかないようにしてほしいんだ」
それは、私が今一番恐れていた言葉。
後の言葉は、何も聞こえてこない。聞こえてくるのは、降りはじめた空の涙の音だけ。

誰か、この苦しみを取り除ける方法を、おしえて。

## Ｔｅａｃｈ．３　見つめていいのかを、おしえて。

翌日。打って変わっての雲ひとつない青空がどこまでも広がっている。

聞こえてくるのは、ふとんをたたく音、子供たちが円を描くように走り回っている靴の音、そして楽しそうな声。休日の、平和な住宅街。

そして私の目の前には、１軒のアパートがある。

２階建てで、上下３戸ずつというこじんまりとしたものだ。

「ここまで来ちゃったけど…」

私の目的はそのアパートの２階、左端にあるさびれて今にも崩れ落ちそうな感じが不安をあおる階段を上り、その突き当たり…ここのアパートの中で遠くにある部屋にある。

このアパートの全ての住民が使用している、名前が連なるポスト。その中に『木下』の文字を見つける。

木下先輩はここで１人暮らしをしている。中学から高校に進学する時に父親が突然転勤になったらしく、高校も既に決まっていた先輩はそのまま残ることにしたという話だった。

ここは、その当時から住んでいる場所だ。

「迷っててても、仕方ないよね」

誰に宣言しているか分からないけど、自分自身で気合を入れるには充分。

どうしても、確かめたいことがあるから。

どうしても、聞きたいことがあるから。

それが、私の原動力。

玄関先に着いて、いつものようにドアをノックする。

ここにはドアチャイムがない。だけどそれゆえに、そのノックの仕方だけで誰だか分かるようになったと木下先輩は言っていた。

そしてその中に私も含まれている。何度か来たことがあるのもそうだけど、私だけのサインがあるということだと思うと、なんだかくすぐったく感じる。それこそ、恋人のような感覚を味わえる一時だった。

「はーい、どちらさまですか～っ？」

ところが今日は、誰だか分かってもらえなかった。というか違う、そもそも声が木下先輩のものじゃない。

ここは木下先輩の部屋、何度も来ているんだから間違っているはずがない。だけどどう考えても聞こえてきたのはどこか子供っぽく聞こえる女の人のものだ。

重々しくきしむ音が聞こえる。ドアの開く音だ。

部屋を間違ってしまったのかも、とどこかで思っていた私は、このもう逃げられない状況に息が止まる。

「あぁーっ！」

そしてその息を飲んでしまい、私はのどが詰まって咳き込んでしまった。

なにせ、ドアから人が現れたかと思うと突然私に指をさしながら大声を出されたのだから。

「お兄ちゃん！女の人！女の人が来てるよ！」

「…おにいちゃん？」

私が咳き込んだことを全く気にも留めていないように部屋の奥へと走っていくその後ろ姿を見ながら、私はつぶやく。

「来てしまったのか…近づかないでくれって言ったのに」

部屋の奥から現れた木下先輩は額に手をあててため息をついていた。さっき木下先輩のことをお兄ちゃんと言っていた女の子はその周りではじけるように飛び跳ねたり指でつついたりしていた。

「ねえねえ、この子彼女？彼女？」

「そんなんじゃないから、かなめはちょっと黙っててくれ」

「はうっ」

木下先輩が女の子の口を押さえる。女の子は手足を大きく動かし

ながらまだ何か言いたそうに声をあげているけれど、全く何を言っているのかは分からなかった。
木下先輩が一人暮らしをしているこの部屋は、玄関を入って両横にキッチンとトイレ、そしてその奥に6畳ほどの部屋がある。
マンガ雑誌や雑誌が数冊転がってはいるけれど、床が見えないというほどのことではなく、むしろ男性の部屋としてはきれいに片付いている印象だ。テレビの横にはロボットかなにかのフィギュアがコレクションケースに入っていたりして、やっぱり男の人なんだなぁと思ったりする。
部屋の中央に置いてある丸く白いテーブルには、ジュースが2つ。ここで今まで2人でゆっくりしていたのだろう。
ところで、今の木下先輩の言葉でひとつ気になったことがあった。
「私の名前、呼ばなかった？」
「はぁ…面倒なことなんだけど、こいつは妹でかなめっていう名前なんだよ。なんか急に休みができたからっていきなり会いに来るなんて言い出してきて」
「は～い！木下かなめ、高校2年生ですっ！ねえねえ、彼女さんですよね？お兄ちゃんとはどこま…ふむぐっ」
いつの間にか抜け出していたかなめと呼ばれた女の子。今度は言い終わるまでに口をふさがれていた。
「さっきも言ったように彼女じゃないから」
「は、はじめましてかなめさん。私の名前、近葉かなめっていうの」
「わぁ…同じ名前。ふふっ、妹と同じ名前にするなんてお兄ちゃん、やるぅ」
そう言いながらかなめさんはまた木下先輩をつつきはじめるが、もう諦めたような顔で今度は止めようとはしなかった。
…自分と同じ名前を呼ぶのは凄く違和感があったけれど、仕方がないことだと思う。
これまで何かと息つく暇もなかったので、ここではじめてかなめさんのことをちゃんと見てみる。

元気なイメージによく似合っている高めに結ったポニーテールがまず目に飛び込んでくる。目がビー玉のように丸く大きくて、口もおしゃべりなことから来ているのか少し大きめ。だけど、常に機嫌良さそうにニコニコと笑っているので、その口はむしろチャームポイントに感じた。

スタイルは…うーん、ちょっと負けちゃってるかも。特にピンクを基調にした上着から出ているふくらみのところとか…

と、その時視界からかなめさんの姿が消える。

「え？…ひゃあっ！」

「うわぁ、ふかふか～！やわらかい～」

いつの間にか私の後ろに回りこんで、私が今見ていたかなめさんのふくらみと同じ場所をつかまれていた。

「あ…きゃっ！くすぐったいっ」

「やめろ…恥をかかせないでくれ」

しばらくされるがままになっていた私を救ってくれたのは、やっぱり木下先輩だった。

手が離れたかと思うと、しばらくしてさっきも見たような首をつかまれて手足を大きく動かしているかなめさんの姿が目に入った。

「だから近づかないでくれって言ったんだけどな…こいつが来ている間、もし会ったらややこしいことになることは分かってたから。迷惑だっただろ？」

「あ…えっと。全然そんなことないよ。かなめさん、かわいい」

「ムリしてほめなくていいから。調子に乗る。ところでここには何をしに」

「ううん、なんでもない」

だって、聞きたいと思っていたことは解決したんだから。

なんだ…『近づかないようにして欲しい』って、そういう理由だったんだ。

「それならあまり来て欲しくなかったんだけどな。うるさいのが2人いるのはかなわない」

「お兄ちゃん、うるさいのって何よ！」
かなめさんがいち早く反応するけれど。
「どさくさにまぎれて私までうるさいの扱いされちゃうんだ…」
「かなめお姉ちゃん、もうこうなったらお兄ちゃんをひどい目に合わせるしかないよね？」
いつの間にかかなめさんが私のことをかなめお姉ちゃんと呼んでいる。ここまで『かなめ』という言葉が多いと、確かに木下先輩としては混乱してしまうかもしれないけれど。
「そうね、ひどい目に合わせないとね」
なんだか、かなめさんとはいい関係を結べそうな気がした。
「な…なにを2人して怖い顔してるんだ…」
そんな私とかなめさんの雰囲気に、木下先輩は後ずさっている。
でも、当然だと思う。これだけ私のことを振り回しているんだから。

だけど、このみ先輩に言われた言葉がまだひっかかってもいる。
『かなめちゃんは妹のような存在だって』
今はこうして近づいていられるけれど、やっぱり私もかなめさんと同じように妹のようにしか見られていないの？
だから、まだ疑問に残っていること…

これからも見つめていいのかを、おしえて。

## Ｔｅａｃｈ．４　小さな幸せを、おしえて。

「まったね～、かなめお姉ちゃん！」
「うん、またねー」
無機質な駅のホーム。目の前には新幹線のドアが開いて待っている。
私は木下先輩と共に、かなめさんの見送りに来ていた。
かなめさんも現役の高校生なのでゆっくりしているわけにはいかないということだった。もちろん、それは当然な話なんだけど。木下先輩は私が見送りに来ることをちょっと渋っていたけれど、かなめさんの勢いに押されて了承していた。
そもそも、なぜ渋る必要があるのかが疑問だったけれど、すぐにかなめさんは私のその疑問を察知したらしく解説までしてくれた。
「お兄ちゃん、照れてるだけなんだよ～。だってだって、女の子２人連れてるなんて一緒に住んでた時は想像できなかったくらいなんだもん」
「あはは、そうなんだ…」
かなめさんとは、最後にはそんな木下先輩のことで盛り上がるほどができるほど気が合っていた。
昨日は色々なところを触られて大変だったけど、今となってはそれもスキンシップみたいなものだと感じはじめた。なんだか毒されているだけかもと考えたりしたけど、きっと気のせいだろう。
そして私も一緒になって触り返したりしていているうちにますます私はかなめさんに好感を持った。これはきっと、木下先輩の妹さんだからこそだったのかとも思う。
木下先輩は、どうしていいか分からなかったみたいだけど。
「ようやく帰ってくれるかと思うとせいせいするよ」
「お兄ちゃんはそうかもね～、これからゆっくりそのふかふかな体を…きゃっ」

かなめさんが1人で身をよじって赤くなっている。
そういえば昨日はなかなか状況を把握できなくて気に留めていなかったけれど、ずいぶんと私と木下先輩が進んでいる仲のように見えているらしい。本当は言われていることはされていないのに、今のような言葉を木下先輩が聞いているのを思うと、途端に恥ずかしくなる。
いったい、木下先輩はどう思っているんだろう。
というか、私もだけど…
木下先輩を見ると、何も聞かなかったかのように普段の話し方と同じくらいのテンションで、かなめさんをドアに押し込みはじめた。
「いいから早く帰れ、かなめ」
「はいはい、ジャマ者はさっさと帰りますよ～だ。あ、かなめお姉ちゃん」
発車のベルが鳴り始めた時、ドアの向こう側にいるかなめさんが私を手招きする。
私が近くに寄ると、かなめさんは一言だけ言った。
「がんばってね」
ドアが閉まっても、新幹線が動き出しても、かなめさんの笑顔は絶えない。
がんばってね、か。今まで勘違いされていると思っていたけど、かなめさんは最初から木下先輩との関係が分かっていたのかもしれない。
それに加えて私は認められた、ということなのかな？
そんなことを思いながらいるとそのまま新幹線は見えなくなっていった。
それはどこか普通に思う別れのシーンとはかけ離れているような、あっさりとした別れだった。
「ずいぶん簡単にお別れするんだね」
「ま、会えないわけじゃないから。どうせこっちから頻繁に会いに行ってるし。まさかこっちに来ることがあるとは思わなかったけど

な」
とはいっても、去っていった線路の向こうを遠く見ている木下先輩は、目を細めている。
やっぱり、お兄さんという雰囲気を隠しきれていないように見えた。
なんだかんだ言っても、大切な人なんだなぁ。もっとも、木下先輩を今まで近くで見てきた私は、そういう人であることは良く知っている。
「ど、どうした」
「ううん、別に。じゃあ帰ろっか、『お兄ちゃん』」
「からかわないでくれ」
期待していたリアクションを取ってもらえなかったのは、ちょっと寂しい。
「つれないなぁ、妹さんの代わりになってあげようっていうのに」
「いらないから」
「またまたぁ」
木下先輩はこれまでにも何度となく聞いているため息を1つ。「仕方ないな」と、私の方を向かずに言った。

私は見送りの帰り、考えていたことがあった。
なんでだろう、私はかなめさんと会ってから、何度か何かに嬉しく思ったことがある。
でもそれが何なのか、これまで何も思い浮かべることができなかった。
「まったく…かなめにはいつも悩まされるよ」
だけど今の木下先輩の言葉で、何に嬉しく思っていたのか、そして何が引っかかっていたのかが分かった。
「木下先輩、妹さんのことは名前で呼んでるんだね」
「まあ、そうだけど。それがどうかしたか？」
「私のことは名前で呼んでくれないの？」

「おまえはなー、なんか妹を呼んでいるみたいでちょっと」
そう、私のことを呼ぶ時はだいたい『おまえ』か、苗字で呼ばれている。
だから、かなめさんのことを少し羨ましくも思ったりした。
「むー、なんかやだ…さっき妹さんの代わりにしてもらえるって言ったばかりなのに」
本当は、妹止まりであって欲しくないというのが本音だけれど。
「そう言われてもな」
木下先輩にとってはちょっとしたことでも、私にとっては名前で呼ばれるのは嬉しいんだよ。だって好きなんだもん。ほんの小さな幸せでも、欲しいと思える。
先輩に対してしか、こんな気持ちにはならないんだから。
だから、木下先輩…

そんな小さな幸せを、おしえて。

## Ｔｅａｃｈ．５　勇気を、おしえて。

「あれ、木下先輩と…このみ、先輩？」
木下先輩に嫌われているわけではなかったということが分かった
その数日後…私が高校の帰り、また木下先輩に会えないかと、あの
ベンチのある公園に向かっていた時のことだった。
相変わらず人のいない…といっても今日は平日なので当然なのか
もしれないけれど、木に包まれながらそんな散歩道を歩いていた。
行く場所はいつものベンチ。あの場所は木下先輩のお気に入りの
場所でもある。きっと今だったらいるだろうと、期待していた。
だけど、先客がそこにいた。ただ単に他の人がいるだけだったら
特に何も思うことはなかったのに。
木下先輩は私と一緒にいる時と同じ場所に座っている。いつもの
私の場所には…このみ先輩が。
この時、ようやく私は忘れていた不安を思い出す。色々と気持ち
が振り回されていたので忘れていたけれど、そういえばこのみ先輩
が木下先輩と話している時、いい感じに見えていたこと…
それは、もしかしたら今までの私と木下先輩の関係を外から見て
いれば同じように見えたのかもしれない。でも、それでも…
「ねえ、もう一度言わせてもらっても…いいかしら」
私が考えをめぐらせていると、このみ先輩の声が耳に飛び込んで
きた。
遠目で見ているので、表情はよく見えない。だけど、今はこの２
人の中に飛び込んでいける状況ではないことだけは確かだった。
通りかかっただけで悪いことをしているわけではないのに、見つ
かるといけないと思って、草の陰に私は隠れてしまっていた。散歩
道を挟んだ反対側でけっこう遠い場所だけど、あたりは静かなので
声だけはよく通って聞こえてくる。
草の隙間からのぞいてみると、それまで２人はまっすぐベンチに

座っていたのに、このみ先輩が木下先輩の方に向き直っている。その間には、子供1人くらいが入れるスペース…その距離感が、私にまで緊張感をもたらしていた。
「もう一度って」
私が隠れることができるほどたっぷりとした沈黙の時間を、木下先輩が破る。
このみ先輩が、その言葉に続いた。
「私が、木下さんを好きだってことです」
「えっ…」
声をもらしたのは、木下先輩じゃない。私だった。
聞こえたかもしれないと口を両手でふさぐ。聞こえていなかったようで、2人の距離、見つめ合っている形が変わることはなかった。
「まだ諦めているつもりはないんですよ、私も」
「悪いけど、飯倉さんのことをそういう風に見ることはできない。前にも言ったよ」
このみ先輩の口調はどこか芯の通る感じがあって、強いようで、その反面、はかなくも聞こえる。そんなこのみ先輩の言葉をさえぎるくらいの早さで、木下先輩の否定が入る。
正直な話、ほっとしている自分がいる。だけどそのすぐ後には、そんな自分を恥じたりもする。
なぜ恥じる必要があるんだろう…私は木下先輩のことが好きだし、だからこそ、このみ先輩に取られてしまうのは避けるべきだと思うのはおかしくないはずなのに。
だけどそう思ってしまうのは、2人がお似合いなんだとどこかで思ってしまっているからなのかもしれない。
いつだったか、私と木下先輩で話していた中にこのみ先輩が来た、あのベンチの時。今も2人が座っているベンチのことだ。
いい雰囲気だと、私は思った。
あの時はこのみ先輩が木下先輩のことを想っていることは知らなかったけれど、それでもそう感じたのだ。

今、こうして振り返ってみると。
釣り合っているのはやっぱり、このみ先輩の方なのかもしれない。
そんなことを思っていると。
「やっぱり、あのコがいいと思ってるのね…かなめちゃん」
突然私の名前を呼ばれて、体が小さく跳ねて息が止まった。
私が呼ばれたわけではないのは話の流れですぐわかったけれど、隠れて見ている罪悪感からは逃れられないものがあるみたいだった。
心を落ち着けて、再び2人を見る。木下先輩は何も言っていないみたいだった。このみ先輩の言葉に何も反応していなかった。
「も、もうやめよ…こっそりするのはよくないよね…」
聞こえないように気をつけながら、私はそう自分に言い聞かせる。本当はバレないようにするには心の中で思うだけで声に出さない方がいいのはわかってる。でも声に出さなければこの場を離れられそうになかった。
足音が鳴らないように、2人に気付かれないように…
そっと、その場を離れた。

「やあやあ近葉さん、元気してるか？」
「きゃあっ！」
「うわあっ！」
公園の出入口近く、多少は遠ざかっているとはいえまだ木下先輩とこのみ先輩は近くにいる状況…そこまで来れた時に急に声をかけられた。
叫んでしまい、周りを見渡す。わざわざ確認しなくても公園の中にいる木下先輩たちの距離は充分にあるはずなので聞こえていないだろうし、幸いなことにあたりには誰もいなかった。
「竹内くん…脅かさないでよ…」
「脅かしてんのはどっちだ。こっちがびっくりしたっつの」
「何言ってるの、びっくりしたのはこっちよ」
「こっちだ」

「こっちだってば」
いつもこの人と話すと、何かと不毛な言い合いになってしまう。
竹内優斗（たけうちゆうと）くん。私と同じ高校3年生だ。高校1年の時に同じクラスだったんだけど、今のようなくだらない言い合いが出来る人はなかなかいないので、クラスが変わっている今でも時々話すようになっている。
「陸上部の練習、もう終わったんだ」
「まーな。なんせ期待のホープだから」
「期待されてたらもっと練習するものだと思うけど…」
「なんか言ったか？」
「ううん、なーんにも」
そういえば話すようになったそもそものきっかけに、木下先輩が所属していた陸上部でたまたま後輩の面倒を見る相手が竹内くんだったということがあったのをふと思い出した。
竹内くんはいつも大きく見開いているんじゃないかと思えるほど目が大きく、それがかわいいと言われる。身長も平均より低めで女の子と同じくらいしかないので、特に年下に人気がある。
「あ、今日もあのコと一緒なんだ」
「まあ、そうだな」
少し離れたところに、いかにも年下といったような女の子がいた。私が視線を向けると、女の子はちょっと焦りながらも小さくおじぎをしてきた。そこには守ってあげたくなるようなかわいさがある。
「いいコだよね」
「嫉妬してくれてんのか？」
「まさかー」
テンポよく話が進む。それが心地良かった。一瞬、公園内の出来事を忘れかけさせてくれる。
だけどやっぱり、その光景は消えかかっても再び戻ってくる。だから、このままの勢いで。
「ところで…いきなりだけど、告白って考えたことある？」

私は、もやもやしていることをそのまま口に出していた。
「と、突然何を言い出すんだ…」
さっきの女の子と同じような焦り方をする竹内くんに、仲いいんだなと考えて笑いそうになってしまうのをこらえた。
「勇気のいることだよねーって思って」
「まあそうだな、そう簡単にできることじゃないとは思うが」
この様子じゃ、まだあのコに告白はしていないみたいだ。
「なーんだ、つまらないの」
「何がつまらないのかイマイチよく分からないんだが…」
でも、それは私にも言えていることなんだよね。
このみ先輩は、凄いと思う。もう一度言わせてもらってもいいかっていうことは、既に2回以上木下先輩に想いを伝えていることになる。
私は、どうだろう…
こんなに一緒にいるのに、はっきりと想いを伝えることができていない。
そもそもこれから先、想いを伝えるなんてことが私にはできるのかな…
とても不安になる私に、誰か。
勇気を、おしえて。

## Ｔｅａｃｈ．６　とまどいを、おしえて。

「昨日、飯倉さんに好きだって言われた」
翌日。その言葉は木下先輩からあまりにもあっさりと聞くことになった。
確かにそれは聞きたいとは思っていたこと。でもなぜ、木下先輩からそのことを言うの？

それは、私と木下先輩が並んで歩いている途中の突然の告白だった。
その時私はどんな顔をしていただろう。たぶん口が大きく開いていたんだと思う。以前にも驚くと木下先輩に口が開いていると注意されたことがあった。
「とりあえず口を閉じてくれないか」
やっぱり今回もそうなっていたみたいだった。
私はこの話を知っている。実際にその場所にいたのだから忘れるわけもなかった。
それでも驚いてしまうのは、このことを木下先輩の口から聞くことはないと思っていたから。でも、それも勝手にそう思っていただけだったのかもしれなかった。
「あ、えっと、なんで私にその話をしたの？」
とにかく何も反応しないわけにもいかず、素直に頭に思い浮かんだことを聞いてみる。
だけど、その質問内容にしてしまったことをすぐに後悔した。わざわざ木下先輩が告白されたことを言ってくるということは。
「ああ、付き合ったほうがいいのか参考にさせてもらおうと思って」
私の予感は、的中していた。もちろん、悪い方向になのは言うまでもなくて。
たぶん遅かれ早かれこういう話になったのだろうけど、私の言葉

は完全に自爆のスイッチを押してしまっていたようだった。
「そ、そうなんだぁ…あ、ちょっと待ってね」
突然の話だったことに加えて、木下先輩の気持ちがこのみ先輩に傾いていること。二重のショックを受けて体が吸収しきれなかったのかもしれない、目にあふれるものがたまりそうになっているのを感じた。
だめ、こんな時に泣いちゃいけない。木下先輩を困らせるだけだって分かっているから。
ただでさえこのみ先輩に向かっている木下先輩の気持ち…私がここで困らせたりなんかしたら、嫌われてますます私から遠ざかってしまいそうで。
だから一度、木下先輩に背中を向けた。悟られないように軽く目じりをこすってみる。どうやら、今はこの程度で大丈夫そうだった。
改めて木下先輩の方に向き直る。聞かれてもいないのに、私は言い訳を思いついたままに言っていた。
「えへへ、ちょっと目がかゆくなっちゃって」
「そうか」
木下先輩から返ってきた言葉は一言だけ。なんとか怪しまれずに済んだようだった。
そこで、会話が止まる。もしかしたら木下先輩が私の続く言葉を待っているのかもしれなかった。
あえて言っていないのかもしれないけど、このみ先輩を一度はふっているということを、あの日の公園での会話で聞いている。それでもこのみ先輩は好きだということを言い続けて、木下先輩が少なくともその気持ちに傾いている。
もしかしたら、もう私が入っていく余地は無かったのかもしれなかった。
それも全部、私がずっとそばにいたというのに何もしていなかったから。何もできないでいたから。
今思うと、このみ先輩が言っていた『木下先輩が私のことを妹と

しか見ていない』『彼女ができないのは私がそばにいるから』と言っていたのは、私をけん制していただけだったのかもしれない。
だけどどちらにしても何もできなかった私には、責めることなんてできない。
それなのにこの先想いを伝えることができるのかな、なんてことを考えていた。だけど、今さらその気になったとしても、もう想いを伝えるには遅いのかもしれない…

「…いいんじゃないかな、きっとお似合いだよ?」

私の家と木下先輩の家への分かれ道。
その時を狙って、私は立ち止まり言った。
気持ちをこらえるのが限界にならないうちに。
ひどい顔になってしまうかもしれない私を見られないうちに。
大丈夫、まだ笑えてる…
私は、木下先輩の目を見て笑顔を作ろうと努力した。

「そうだな。わかった、ありがとう」

そう言われるのは分かっていたはずなのに。
それでも、息が止まるほどに苦しい。
どこかで否定してくれることを期待していたのかもしれない。
付き合うことを考えてるなんて冗談だよ、と言うと思っていたのかもしれない。
そんなこと、こんなに真剣な顔をしているのだからありえないのに。

「うん、じゃあね。またね」

分かれ道で答えたのは正解だった。これ以上木下先輩の顔を見る

ことができない。
私は今にもこぼれ落ちそうなものを若干上に顔を向けながらおさえて、その場を去った。
どんな表情で私を見ているのか、気にはなったけれど。
…でも、それでも。やっぱり振り向くことはできなかった。

一度我慢すると、意外とこのまま家までたどり着けそうな気がした。
もちろん、このままもう一度木下先輩の顔を見たら、そのままでいられることはできないだろうけど。
道路上で泣いたりなんかしたら、知っている誰かに見られてしまうかもしれない。
どうせなら、家まで我慢しよう。
なんだか、意外にそんなことを冷静に考えられる自分がおかしかった。
そんなことを考えながら歩くと、もう家の前まで来ていた。
あと一歩。もうほとんど崩壊しそうなくらいだったので、更に玄関まで足を早めようとした。
だけど、その時。
「近葉さん」
「た、竹内くん！」
門の横に誰かいるとは思っていた。気にも留めていなかった。
この頃の竹内くんはすごくタイミングの悪い時に会う。
だけど、この後の竹内くんの言葉は、そのタイミングの悪さがなぜ起こっていたのか証明するのに充分だった。
「話がある。近葉さんのことが好きなんだ」
竹内くんは、現れる時も話をする時も、いつも突然。
でも、なんでこんな時にまで。
誰にも見られずに泣くことができるところまで、あと少しだったのに。

私の気持ちは、もうここまでがおさえるのに限界だった。
「うっ…うう…」
声を押し殺そうとしても、だめだった。ここまで我慢してきた分が、一度に噴き出しているのが自分でも分かる。
「ちょ、ちょっと！ごめん、突然だったからいけなかったのか？」
私は首を振るのが精一杯だった。

頭の中がぐちゃぐちゃになる。
なぜ木下先輩に付き合うことを勧めたの？なんで今、竹内くんに告白されてるの？
全然状況を理解できない私に、誰か。

このとまどいを、おしえて。

## Ｔｅａｃｈ．７　想いの伝え方を、おしえて。

木々のこする音が、心に響く。
ようやく春の訪れが近づいてきて、その頬をなでる風は、包み込むような暖かさを感じた。
目の前には、３年間ずっと見てきた高校の校舎。
堂々と中に入ることができるのも、着慣れて可愛いと改めて感じてきたこの制服も、これが最後の日だと思うと言葉にならない思いが湧き上がってくる。
「なんか、実感ないなぁ…」
このまま明日からも、ここに来てしまいそうな気がしてしまう。
ただ私は今日、みんなとその感傷に浸ったりするだけでは終われないのをしっかりと感じていた。
「あっ…」
ある人影を見て、私は物陰に隠れた。
そこにいたのは、竹内くんと木下先輩の姿。
「そうだよね、そういえば同じ部活だったんだ…」
２人にバレないように様子をうかがいながら、感傷に浸るだけでは終われないこと…今日までにはっきりとさせておかなければいけないことを再確認した。
それは、私のこのあいまいな気持ち。

「落ち着いたか？」
「う、うん…」
竹内くんに突然の告白を受けたあの日。私はもう何が何だかわからなくなって、ただ涙が止まらなくなるばかりだった。私がなんとか口を開けるようになるまで時間がかかったというのに、竹内くんは何を言うでもなくそばにいるままだった。
「気づかなかっただろうけど」

そして改めて、竹内くんが私を見てくる。…違う、彼が見ていると意識している私の方が竹内くんの方を見ていたのかもしれない。
「好きだったんだ。他の人を見ているのは分かってるんだけど」
「でも、あのいつも一緒にいたコは…」
突然私の想いの核心をつかれて、焦ったのかもしれない。このままだといつまた想いがあふれて涙が出てきてしまうかわからない。そうならないように、竹内くんの言葉に自分でも驚くほどの早さで言葉を返していた。
「相談に乗ってもらってた。よく会うのは、いつも背中を押すためにって言いながらくっついてきてただけで」
「そ、そうな…んだ」
声がどうしても詰まってしまう。
「返事は高校を卒業する日まででいいから。それまでは少しでも意識してもらえればそれでいい」
そこにはいつもの掛け合いなんてどこにもなくて。
ただただ、私は竹内くんの話を一方的に聞くことしかできなかった。

そしてその期限の日…今日になるまで、私は答えを出せずにいる。
木下先輩には私自身が、このみ先輩を勧めている。あれからどうなったのか私は知らない。結果を聞くのが怖くて、会ってもいなかったから…
竹内くんは、私を好きと言ってくれた。それからあの告白された日のことは話に出さないけれど、聞きたいという気持ちは持っているはずだと思う。私が木下先輩にどうなったのか聞けないのと同じだと思うから…
卒業式が滞りなく進んでいく中で、ここ最近のことを思い返す。
一体化した卒業するという寂しさの輪から、私だけが外れているようだった。
寂しさという部分では変わらないのかもしれないけれど…

卒業することが寂しくないというわけでもないのだけれど…
「卒業、おめでとう」
壇上で校長先生から卒業証書を受け取る時も。
「やっぱり、何かが終わるのって辛いよね…」
席に戻って、座席が隣になったクラスメイトに泣きながら声をかけられた時も。
どこか、意識は違うところに向いている。
その意識はどこに向かっているのだろう。
竹内くんのことは、告白されてから毎日のように私の意識の中に居座っている。
いつもくだらない話ばかりしているけれど、でも一緒にいると楽しくて。
優しさを持ち合わせていることも知っている。それも告白されたその日のことを思い返すと、よくにじみ出ていた。
だから、私は…

卒業式が終わって、担任の先生の最後の挨拶も終わって。
みんな名残惜しいみたいでしばらく教室には残っていたけれど、時間が経つにつれて1人、また1人と去っていく。
気がつくとオレンジ色に染まった西日が、黒板のみんなの落書きをスポットライトのように照らすような時間になっていた。
それまで残っていたのは私と…そして他のクラスから入ってきたもう1人だけ。
「竹内くん」
私は、その相手の名前を呼ぶ。
そして。
「私も…竹内くんのこと好き、だよ」
すごくぎこちないことが、自分でも分かる。
こういう感じで、本当にいいの？

想いの伝え方を、おしえて。

## Ｆｉｎａｌ　Ｔｅａｃｈ　おしえて、恋のイロハ。

吐く息が電灯の白い明かりに照らされて、張り詰めるような冷たい空気に溶け込んでいく。
私がこの数年間、幾度となく座っていた公園のベンチ。夜に来るのはたぶん初めてで、いつものように静かなのももちろんだけれど、何も見えないところもあるくらい暗いのに、不思議とどこか幻想的なものを感じた。
私の目の表面に浮かぶ、また油断するとこぼれ落ちそうなフィルターを通しているからなのかもしれない。
１つ１つの小さな明かりは十字を描いて、輝いていた。
私の隣には、１人の男の人がいる。
卒業式が終わってもまだ卒業できていないこと…私の気持ちに卒業できる最後のチャンスが、今ここにある。

「木下先輩…えへへ、伝えたいことがあるんだよ」

なるべく重くならないように。いつもの私が出せるように。
隣にいる…そう、木下先輩に伝えなければいけないことがある。

「無理するなよ。顔に出てる」
頭の中に繰り返される、その言葉。
私が竹内くんに好きだと伝えた直後に言われた、メッセージ。
きっと、竹内くんは私以上に私のことを分かってくれていたんだ。
他の人に気を遣って、自分自身の気持ちを押し殺していた私を…
「だから、嬉しいけど…ごめん、その気持ちに応えることはできな

い」
告白されて、それを受け入れたはずが断られる…でもそれは、思えば当然の結果だったんだ。
私はその言葉を聞いた時には、もう顔を見ることができなくなっていた。どんなに私は竹内くんにひどいことをしているのか…よくわかっているつもりでも、きっとそれ以上に辛い思いをさせてしまっているはずで。
「そんな辛そうな顔すんな。こっちが辛い」
最後のその泣きそうでいて悲しそうにも見える顔だけは、私の目に焼きついた。

（ごめんね、竹内くん…）
私がその顔を思い返しながら、もう一度心の中で謝っていると。
「こっちからも言いたいことがあって」
勢いに乗せて想いを伝えようとしたのに、それをさえぎられてしまうほどの木下先輩の言葉が飛び込んできた。
「さっき、飯倉さんに会ってきた」
もしかしたら私が勢いに乗せようとしたのは、このことを聞きたくなかったからかもしれない。
全身が固まって動けなくなる。息ができなくなりそうになる。
そうだよね…私が想いを伝えたところで、既にこのみ先輩のことを受け入れていたら…
想像したくはなかったけれど、それは現実として向き合わないといけない。
そう、わかっていても…
「へぇ、そうなんだぁ…何を話してきたの？」
「ふられてきた」
それはもう、あまりにも自然に言われるものだから。私は危うくおめでとうと言いそうになる口を引っ込めた。

「…えっ？」
驚くことしかできなくて。後に続く言葉が思いつかなくて。
「他の人を見ていることが分かって辛いって言われた」
まさか私と同じことが起こっているとは思わなくて…
「だからさ」
「待って」
たぶん今から言われようとしていること…先に言われるより、自分から言いたい。
「好きだよ、木下先輩」
それは、何も飾ることなんてなく。
本当の想いを、ありのままの自分で伝えられて。
少しずつ、ゆっくりと。心の芯から温まる感覚で埋めつくされていく。
「…ありがとう、かなめ」
木下先輩がはじめて、私のことを名前で呼んでくれる。
私には充分すぎる、返事の代わりだった。

ずっとすれ違ってばかりで。
ずっと気持ちを聞けなくて。
ずっと誰かに遠慮していて。

そんな私たちだったけれど、最後にちゃんとこうやって通じ合うことができた。
今だけじゃなくてこの先も、気持ちを変えずにいたい。
今度こそ、想いが別々の場所にいってしまわないように。
そうならないように、これからは彼と一緒に、１つ１つ。

おしえて、恋のイロハ。

## Ｆｉｎａｌ　Ｔｅａｃｈ　おしえて、恋のイロハ。（後書き）

ここまでお付き合いいただいた皆さん。
長い間ありがとうございました。
無事、ハッピーエンドに…ん？

…あっ、もうちょっとだけご一緒して頂けないですか？とお願いをすることになりました。
実は、まだ１話だけこの物語は残っているのです。

エピローグ？
うーん、ちょっと違うんですよね。

次回、Ｅｘｔｒａ　Ｔｅａｃｈ。

## Ｅｘｔｒａ　Ｔｅａｃｈ　話の終わりは、まだまだ。

「まったく、世話のかかるやつらだったぜ」
僕は、卒業式の日まで何をやっているんだろうか。
暗闇の公園の片隅で見つめ合っている２人を見て満足しているほど、僕もお人よしではない、
ただ、なかなかくっつかないのを見ていると無性にストレスがたまってくる。とても口を出さずにはいられなかったのも事実だった。
「そうだったな…竹内、おれも同感だ」
「うそつけ、お前はこのみさんを狙ってるから好都合だっただけだろ」
隣にいる、最近突然茶髪に染めだした男に容赦なくツッコミを入れる。
僕は今高校を卒業したばかりで、隣の男は大学生。１つ年上のはずだが、どうも幼なじみというせいか丁寧な扱いはしにくい。
「ずいぶんな言い方だな…気持ちもないのに告白なんかするような神経の持ち主よりはまだマシだと思うんだが？」
「何を言ってるんだ。こうやってめでたしめでたし、で終わっただろ？」
「まあ、そうなんだが…」
「それよりもこれでチャンスができたじゃないか、さっさとくっついてしまえ」
「簡単に言ってくれるんだな。どれだけ苦労しているか知らんくせに」
あまり頻繁には会っていないけど、まあ確かにこのみさんのあの性格はとっつきにくいものがあるかもしれない。
「…頑張れ」
「よく分かって頂けたようで。で？竹内は浮いた話の１つでもないのかよ」

「ないな」
「即答かよ」
そう言われても、ないものはない。
女の子にはまるで縁がないしな…あえて言うならば、近葉さんとくっつけようと勝手に応援しだした後輩と、その当人の近葉さんくらいか。

近葉さん、か…
確か高校入ってすぐのことだったな。
「むー」
女の子が机に身を預け、一瞬どこから聞こえてくるのかわからないほどの妙に通りやすいうなるような声を出している。
「どうした？」
「きゃあっ！」
いや、突然叫ばれても。と思ったりもする。
「な、なにどうした」
「おどかさないでよ、もう…」
「できればこっちが言いたいセリフなんだが…」
「こっちよ」
「こっちだ」
少し前にも繰り広げたような気がするこのやりとり。
しばらくして、気づいたんだよな…部活の先輩である木下さんに想いを寄せていて、それで悩んでいたってことを。
クラスが一緒だったのは最初の1年間だけで、その後は違っている。なのになぜかよくふざけあうようなことがずっと続いて…近葉さんは相手こそ言わなかったけれど、その想いをかなえる手伝いができればいいな、と思えた。

この気持ちは、一体なんだったのか。
今でも、よくわからない。

「その顔は、誰かにふられたような顔だな」
隣の男が口を出してくる。
「…そうなのかもな」
それは、ただ言葉で言った時とは違う…というかむしろ僕の方が形式上ふった側だったはずなのに。
ふられた、という感覚。それはそう言われてみると確かにしっくりくるものがあった。
「ま、お互い頑張ろうや」
様子を察してくれたのか、気持ち悪いくらいに優しい口調で言われる。
「そうだな」
でも僕も素直に、そう思える。
まだ、僕の物語は始まったばかり。

話の終わりは、まだまだ。

## Ｅｘｔｒａ　Ｔｅａｃｈ　話の終わりは、まだまだ。（後書き）

最後まで読んでくださった皆様、ありがとうございました。

この物語はそもそも、「おしえて。」のＴｅａｃｈ．４あたりになる予定でした。

それが結局、自分で設けた「おしえて。」の最大文字数を超えるどころか、せめて２話に分けないと話が終わらなさそうだという理由で別枠に。

どうせ連載するなら２話では寂しいし…と思った結果、話を膨らませに膨らませてＴｅａｃｈ．０とＥｘｔｒａも含めて１０話。よくやったと思います。

先輩、先輩と文章がしつこくなった点については反省点です…

あと各キャラクターの登場の突拍子の無さ。特に竹内くんの扱いが。

今回は突発的に短編→連載に方向転換したので内容が薄いのは仕方ないと思いつつももうちょっとなんとかしたかったかも。次に連載モノを書く時には気をつけていかないと。

…というか、やるのかどうかさえ分からないけど。

まあ、アクセス数も微弱なところですから。ちびちびとやれるだけやっていきます。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8447f/

---

おしえて、恋のイロハ。

2010年10月8日13時58分発行